

《紹介》

E. パトラジアン

『4～7世紀のビザンツにおける経済的貧困と社会的貧困』

Evelyne Patlagean,
Pauvreté économique et pauvreté sociale à Byzance,
4e-7e siècles. xii+482 p.
Paris-La Haye, Mouton, 1977

大 月 康 弘

4世紀から6世紀にかけての東ローマの大都市では、各都市の競技場や劇場での群集の存在や頻発する市民の騒乱が見られ、また都市人口そのものも増大したことが知られている。例えば4世紀に新たな帝都となったコンスタンティノープルでは、コンスタティヌス帝がこの新都建設に当って積極的な住民招致政策をとり、これに応じて多数の地方属州民が新首都に移住した。その結果この町では、開都から1世紀ののちにはすでに10万から20万ほどの人口があったと言われ、国家の建設事業に雇われた労働者やパンを求める「貧困者」大衆が多く存在したことが知られている。新都におけるこういった移住民の大半は、この町の住民のいわば「下層」を成すものであった。「貧困者」はまた、都市ばかりでなく農村部にも存在していたことが知られる。大土地所有制の進展に伴ってコロヌスと呼ばれる隷属農民が多数出現したことは、すでにかつての封建制論争の中で詳細に明らかとされた事実であった。そこでは、所謂コロヌス立法の分析を通じて「貧困者」であるところの所領農民の法的地位が問題とされたのであり、分析の結果、この法令群の目的が、逃亡コロヌスの引き戻しによって、またそれが事実上不可能となってからは、新たな逃げ込み先の所領に彼等を繋ぎ留めることによって、基本的徴税単位としての大所領の安定的経営を、国家の手で確保させるためのものであったことが明らかとされたのである。(渡辺金一『ビザンツ社会経済史研究』岩波書店刊を参照)そしてまた以上の世俗の「貧困者」出現の契機に加えて、5世紀以降、農村部を中心に多数の修道士が登場するようになる。この自発的「貧困者」もまた、初期ビザンツ社会における「貧困者」の一員であった。

古代末期ローマ＝初期ビザンツ史研究の長い歴史の中で、コンスタンティノープルやアンティオキア等の大都市を中心にこの時期増大したこれら「貧困者」の実態解明の作業とその

理論的把握の議論は、今までほとんど行なわれることがなかった。それは一つには法典、年代記を主要素材としてきた従来の史料操作の傾向と、またとりわけこの「貧困者」の社会的性格を把握するための理論的枠組の欠如とに由来していたと言ってよいだろう。フランスの女流ビザンティニスト、エヴリーヌ・パトラジアンによる本書は、この課題に正面から取り組んだ初の本格的試みであり、未開拓であった「貧困者」の生活実態について幾多の知見を提供するとともに、「貧困者」を取り巻く社会諸関係の理解について重要な指摘を行なっている。以上のような「貧困者」群は、初期ビザンツ帝国の社会および経済システムの中で、如何なる役割を担っていたのだろうか。本書におけるパトラジアンの課題は、一方でこれら「貧困者」の社会的実体と「貧困」概念を検討することにより、また他方で、初期ビザンツ社会においては個々人の生活の経済的側面がその社会的地位を決定する唯一の要因となったこと、従ってまた「貧困者」の社会的実態を検討することで逆にこの社会の特性が描き出されることを、まさにかかる検討を通じて示すことにある。もとよりこの小論で、多岐に渡る個別問題の全体を紹介することはできない。立ち入った議論はまた後の機会に譲ることとして、ここでは、本書の叙述構成を明らかにすることによって、著者の斬新な問題意識の紹介に努めたいと思う。

この初期ビザンツ史研究の第一の特色は、法史料や年代記の利用もさることながら、広範な聖者伝研究また考古学、碑文学研究の基礎の上に行なわれていることにある。そしてまさに従来とは異なる史料カテゴリーに依拠することによって、これまでのビザンツ社会経済史研究からは期待できなかった研究視点が得られたと言っても決して過言ではないだろう。パトラジアンの研究を特徴づけている第二の点は、それが差し当って「貧困」研究でありながら、実に射程の長いパースペクティブを有しているということである。本書に見られる独創的なモデル設定については後に述べるが、ともあれ本書での議論は、その問題提起の射程においてこれまでの古代末期＝初期ビザンツ史の総合叙述に比肩しうるものであると言えるだろう。著者は1960年代にM.モラの主宰する“「貧困」と「貧民」に関する共同研究”に参加していた。この共同研究の成果は、1974年に全2巻計960頁に及ぶ論文集（*Études sur l'Histoire de la Pauvreté, sous la direction de M. Mollat, Paris.*）と、主宰者モラその人の手になるナラティブな通史（M. Mollat, *Les pauvres au Moyen Age. Étude sociale. Paris. 1978*）となって刊行されている。これらに収録された諸論考が、貧民の実体、救貧活動、清貧理念、貧民概念等々についてのもっぱらザッハリッヒな知見を提供するにとどまっているのに対して、本書における著者の課題設定は、「貧困者」をピボットとしたビザンツ初期社会史の全面展開に向かっているのである。

さて、本書の章題は以下の通りである。第1章. 史料における用語としての貧困者と富裕者、第2章. 物質面の環境と社会身分、第3章. 死亡率と疾病率、第4章. 家族の結び付きに対する態度——肯定と否定——、第5章. 都市・交換・贈与、第6章. 耕地と社会、第7章. 支払手段と支払尺度。

まず第1章では、ローマ社会における「市民」の二分法の変化が、史料用語の変化の問題

として跡付けられる。それによれば、共和政期以来都市民を二分する表現として用いられてきた *honestiores, humiliores* という一対の用語は、そもそも刑法分野に由来するもので、社会的地位の違いを表現してはいても、経済的不平等そのものを表わす言葉ではなかったという。cf. G. Cardascia, *L'apparition dans le droit des classes d'honestiores et d'humiliores*. 《*Revue historique de Droit français et étranger*》série 4. 28 (1950) pp. 305–337. 461–485. ところがパトラジアン自身の研究によると、4世紀以降の諸著作においては、この用語法はいまや、個々人の生活の経済状態に即して「贈与者市民」「雇用者」および「受益者市民」「被雇用者」という意味で用いられるようになるのである。むしろ、かかる行為者としてのステータスが、端的に物質的に富んでいるかいないかによって規定されていたと読み取れる。そしてさらに、キリスト教著述家たちの用いる *ptôkhos*, 異教著述家たちに多く見られる *penês* なる用語も、ともに全く経済的に困窮状態にある者たちの表現に用いられ、この経済的状态の表現から出発して、その者の社会的立場全体（施し物を受ける、単純労働に雇用される）を意味しているのである。パトラジアンはこの章において、4世紀以降、ある者の社会的立場を決定する要素が、もっぱらその者の経済的・物質的状态になったことを用語上の問題として確認する。

さて著者によれば、帝政期以前における社会的不平等は、各人の都市共同体への帰属という「当然の感情」によって和らげられ、各個人は自分を都市共同体を通じて国家と容易に自己同一させることができていたという。経済的弱者も、有力市民＝富裕者によって各都市内で行なわれていた伝統的な「寛厚」行為 *eleutheriotês* に与って、生活しえていた。ところが、3世紀のいわゆる軍人皇帝時代の帝国の混乱によって、東方諸都市の自律的機能が弱体化しはじめると、この帰属意識が揺らぎ始めたという。この事態は、さらに284年に登位したディオクレティアヌス帝以降の諸帝によって、租税制度と帝国官僚組織の抜本的整備のための諸施策が執られ、帝国の新たな中央集権組織の強化が都市の伝統的な自立性をさらに縮小させるようになるのと並行して、ますます進展した。各都市の参事会員身分層＝「贈与者市民」層は全体として大きく後退し、市民の帰属意識の依って立つべき都市の自立性はいまや著しく低下した。一方、国家の新たな中央集権的権力機構は、もはやローカルな共同体感情には基盤を置いてはおらず、刑罰と課税についての強制的な法体系に依拠し、そしてこの事態に伴って、個々人の生活の物質的側面は、もはやローカルなパトロナージュ関係で覆われることなく露わとなったのである。4世紀以降の「貧困者」は、こうして純粋に経済的な側面において「貧困なる者」として認識されるようになったのだった。パトラジアンの論旨は、凡そ以上の通りである。

この第1章での確認事項を踏まえてパトラジアンは、以下の諸章における考察を展開していくのであるが、そのうち第2章から第4章までは、著者の長年にわたる聖者伝研究の基礎の上に立って、「貧困者」の生活実態、生活環境についての諸事実を提供して格好のモノグラフを成している部分である。まず第2章では、古代末期東地中海世界での物質生活全般（食事、住居等）を取り上げ、それに照らして「貧困者」の貧困者たることの基準、つまり「貧

困者」と非貧困者との境界をさぐっている。ビザンツ人の日常生活、とりわけ食生活については、すでにクークレス Faidonos Koukoules による『ビザンツ人の生活と文化』（全6巻、アテネ、1948－55年）があった。しかし、著者によればこの集成も、データを階層化して分類せず、通時的考察に欠けているなどの点で、十分なものとはいえないのである。こうしてパトラジアンは、主にシリア、パレスティナ、小アジアの聖者伝に取材して、パンをはじめ、植物性食品、動物性食品、調味料類、デザート類にまでわたる食生活像を示し、第1章で確認した事項、つまり「貧困者」の基準がいまや純粋に物質的観点から規定されうること为例示するのに成功している。（38－43頁。表1－a, b, c）（「貧困者」の食生活に特徴的なことは、動物性食品が決定的に欠けていたということである。）

第3章では、第2章で提示された社会の物質的条件に規定されたものと考えられる平均寿命や疾病率、気候という自然要因による季節ごとの死亡率や、飢饉や大地震などの災害と人口との関係等について事例を求め、死亡率と疾病率という観点からこの時期の人々の置かれた一般状況を検討する。また第4章においては、キリスト教という新しいモラルの定着によって、伝統的な結婚慣習がどう変化したかという基本的問いを立て、禁欲的生活を旨とする修道制、およびその極端なケースとしてのアセティズム（ascétisme, 苦行主義）の5世紀における東方諸属州での大規模な発展を指摘した上で、結婚の減少傾向と、実際の結婚生活での禁欲的態度の促進が想定される。

さて、以上の各章での吟味から明らかとなる「貧困者」の生活実態についての考察は、確かにそれ自体として大変魅力的なものとなっている。しかし、著者自身も述べるように、それらの考察そのものは、彼女の研究の最終目的ではありえず、この時期の「貧困者」を初期ビザンツ社会全体の中に位置付けるための予備的作業の性格を持つと考えられるのである。すなわち著者は、以上の諸章において、ひとり「貧困者」のみに係わる事柄でなく、初期ビザンツ社会全体の「経済状況」を規定していた歴史的条件についての論考を行なっているといえよう。

さて、かかる構成の下続く第5章「都市・交換・贈与」においては、その中心的課題として、都市内での「貧困者」を取り巻く様々な社会関係が取り上げられるとともに、「貧困者」をめぐるこの社会諸関係こそが、まさに4世紀以降の都市の経済システムそのものを推進させる主要な原動力であったと説かれる。この時期の東方諸都市は、「帝国の社会生活において決定的な役割を担っていた」のであり、それは「古代より受け継ぎつつ、キリスト教化によって変容された政治的・文化的機能と、またとりわけ経済的機能に表われていた」。そこで、従来の都市研究が「史料制約」からコンスタンティノーブルやアンティオキア等の大都市に限られていたのに対して、著者はまず一節を設け、キリキアの一港湾都市コリュコスに残された588の墓碑文の分類を通じて、この町での職業分布像の復元を試みる。cf. Monumenta Asiae Minoris Antiqua. vol. 3: Denkmäler aus dem Rauhen Kilikien. hrsg. von J. Keil und A. Wilhelm. The Manchester U. P. 1931. 地方中小都市の経済生活像がこれほどまとまった形で系統的に取り上げられたことは注目に値するし、それはまた、ここでの中心的

課題の結果がかかる地方都市でも妥当していたことを明瞭に語る役割をも果たしている。

続く諸節では、「古典的寛厚からキリスト教的慈善へ」「生産刺激材としての贈与行為」「都市における貧困者の政治的側面」「都市空間・人口と経済環境」の各表題の下に、上に述べた中心的課題が扱われる。考察の対象は、やはり主に史料の豊富な上記二都市であるが、それはともかくとして、都市の「貧困者」には、少ない賃金ながらも自ら働き生計を立てる者と、肉体的理由により他者からの施しに全く依存している者がいたことが改めて確認される。前者は、とりわけ新首都で多く見られたように、この時期以降国家の手に委ねられるようになった建設事業に、単純労働者（運搬作業、開削作業、石切り等）として雇用された者たちであり、健康な一般都市大衆の一部を形成していた者たちである。また後者は、キリスト教徒たちの自発的な行為として始められ、4世紀末からは教会によって集中的に担われることになった慈善活動の対象となった者たちであった。

パトラジアンは、この建設活動と慈善活動が都市の経済活動そのものの推進的担い手であったとの見通しから、これらの活動の実態を考察する。それによれば、建設事業は、各都市参事会員層の政治的経済的退潮に伴って今や国家が企画するところとなり、租税制度の整備と徹底した徴税業務によって徴収した貨幣を国家が再び流通させる主要パイプになったという。そして慈善活動についていえば、ここで問題となる4世紀以降のそれは、一方で2世紀以来キリスト教徒たちの間で行なわれていた貧民救済制度である「ディアコニー制」と、他方でギリシア・ローマ世界に伝統的な「寛厚」慣習との結合形態であった。つまり、信仰心に導かれて、あるいは市民の「名誉」を志向して人々が直接「貧困者」に行なった自発的、散発的「施し」が、4世紀から5世紀の経過のうちに教会への寄進、遺贈によって理念的にも実際にも肩代わりされた、と説かれる。そして4世紀後半のヨアンネス・クリュソストモス、バシレイオス等教父の説教、書簡類が引用されて、かかる転換が進んだのはまさに彼等の活躍した時期以降であったことが明らかとされるのである。周知の通りカトリック＝キリスト教会は、313年のミラノ勅令による公認に始まり380年には国家宗教の唯一の担い手となった。遺贈受領権、また地租をはじめとする各種租税からの免税特権を付与された教会は、世俗のそれと並んでいまや帝国内の大土地所有者となり、この経済基盤を背景に社会救済活動＝慈善活動を展開していく。この体制はさらに5世紀末になると一段と進み、教会内には、それぞれ独立の法人格をもった専門の機関（救貧施設、宿泊施設、病院、孤児院、養老院）が設立されるようになる。国家はこれら教会機関にも地租を含む免税特権を付与し、こうして慈善事業は、初期ビザンツ期を通じて財政制度上「国家的業務」と位置付けられるようになったのである。

続く第6章は、「村落と農業生産」「村落社会」「農民負担（教会・徴税・所領主・農民の不服従）」「人口移動」の諸節から成っている。言うまでもなく農村は、初期ビザンツ社会全体を経済的に根底から支えていたのであり、農民は、余剰生産物の被収奪者として「貧困者」であった。冒頭著者は、従来の農村研究に触れて、それらが農民社会の実態にほとんど触れることもなく、もっぱらその法的地位を論ずるだけであったと断じている。こうして本章で

は、著者の長年の聖者伝研究の成果、また考古学資料が縦横に活用され、考察の中心的課題は、合法的、非合法的に賦課される農民の負担、またそういった状況の下での農民の社会組織の実態に向けられる。周知のようにビザンツ農業史、土地制度史は、1950年代から60年代にかけての封建制論争の時期をはさんで、法典上での農民の扱いを明らかにし、またその意味の検討を行なってきた。パトラジアンが基本的には同意を示すフランスのP. ルメルの研究によれば、大所領、自由村落ともに、当時確立しつつあった国家の財政制度上の基本的な徴税単位であったのであり、国家は制度貫徹のために厳格な措置をもって農民把握に努めたのであった。cf. P. Lemerle, *Esquisse pour une histoire agraire de Byzance: les sources et les problèmes*. *Revue historique* 219 (1958) しかし法史料は、財政制度確立のための国家の諸施策 (fiscalité) を伝えるものではあっても、農民に課された負担の全体を示すものではありえない。著者によれば、初期ビザンツ期の農民は、自由農民であれコロヌスであれ、全体として次の四点において上級権力者の収奪の対象となっていたのである。1. 国家に対して支払うべき租税、2. 土地所有者に支払うべき地代、3. 国庫から逃れるために求めた非合法的私的保護関係に対する支払、4. 教会への支払 (但し、西欧における十分の一税のような発展をみることはなかった)。これよりして、従来の議論が事態の一面しか捉えていなかったことが明らかとなるのであるが、それはともかくとして著者がここで重視するのは、上級権力者による農村からの収奪機能そのものである。

第6章の中で以上と並んで詳細に論じられているのは、修道制の問題である。修道士自体が自発的「貧困者」でもあり、また第5章で考察されたような慈善活動が、修道院においても行なわれていたからである。5世紀半ば以降、修道制度がシリア、パレスティナの農村部を中心に本格的に浸透していった模様が、修道院の建設件数を数え上げることで示される。(362頁。表16-17。さらに312-313頁ではこの地方での教会建設数が示されている。表14-15。) それによれば、北シリアの石灰岩山地中からパレスティナにかけての一带では、4世紀から7世紀までに建設された修道院92のうち、5世紀後半から6世紀後半までの1世紀間に建設されたものが62にも及んでいることが確認される。さてまた修道院数の増大とともに、当然修道士の増加も予想されるところであるが、それを明示的に伝える史料は存在しない。そこで著者は、幾つかの修道院で確認しうる修道士の出身地を例示的に検討し、近郊の農村部ばかりでなく遠方の出身者も少なからずいたことを示している。そして、合わせて修道院が何よりもアジールとして機能していたことを指摘して、重圧に苦しむ逃亡農民がそれら修道院に存在していたことを示唆することでこの章を閉じている。

さて、以上第5章、第6章において展開されているパトラジアンの初期ビザンツ社会像には、全体としてそれを支える一つの独創的なモデルが想定されていた。第7章と結論において示されているそれは、次の二つの「財の移転」の様式の結合を骨子とするものである。すなわち、「無償の贈与」(le don gracieux)と課税や地代、非合法的取り立てなどの「経済外的強制」(la contrainte non économique)である。パトラジアン自身の定義によれば、前者は「最も貧困な者たちの消費と雇用機会のために最少限必要な余剰の再分配を行なわしめる

もの」であり、後者は「余剰を取り除きまた蓄積するのにもっとも効果的な手段」であった（425頁）。著者が抽象化して理解するところによる初期ビザンツの経済社会は、最終的には国家に行き着くところの社会の収奪機能と、それと対流をなす再分配機能との結合によるものと考えられる。それは、当初、貧困の社会的規定の実態をなす様々な社会諸関係の具体的把握に始まりながら、それらをいわば統合する経済社会のダイナミズムの一端に触れるものだった。なお著者の言葉によれば、財の移転の様式のうち、他ならぬこの二つを結びつける社会的選択の歴史上の根拠こそが、中央集権的な行政組織とフィスカリテ（「財政至上主義」）とで装備された最高権力者＝皇帝のもつ政治的伝統の中に存し、また、有力市民たちの有する「寛厚」という文化的伝統の中に存するのである。

本書において、「貧困」研究に出発しながら初期ビザンツ社会における極めて多岐にわたる諸問題を扱ったパトラジアンに対しては、厳格な実証主義の立場から、個別問題について論証不十分との批判がある。（例えば、A. Guillou による *Byzantinische Zeitschrift* 74(1981) S. 81－84 での書評）しかし本書における著者の課題意識からして、かかる批判は的を射たものとは言えないであろう。本書からは、ローマ没落論などにはまずもって期待できそうにない新たに胎動する社会のみずみずしいイメージが喚起されるし、また、かつてビザンツ学分野でも活発に行なわれた封建制論争の中の議論、とりわけマルクシズムのビザンチニストたちの掲げた社会構成体の移行論などからはとうてい期待できそうにない側面から、この社会の全体像把握の試みが提起されていると言えるだろう。それは、パトラジアンが初期ビザンツ社会に対する社会認識のために、上のような斬新な双方向性のモデルを、いわば「発見術的に」（ヒューリスティックに）設定することの有効性を身をもって示し得た結果ではないだろうか。

《RÉSUMÉ》 BOOK REVIEW

E. PATLAGEAN: *PAUVRETÉ ÉCONOMIQUE
ET PAUVRETÉ SOCIALE A BYZANCE, 4e-7e SIÈCLES,*
Paris-La Haye, Mouton, 1977

Yasuhiro OHTSUKI

This book is the first attempt to investigate the economic and social conditions of “poverty” or the “poors” in the Early Byzantine society. It is well known that at this period many “poors” emerged in big cities such as Constantinople and Antioch, and in the rural regions as well. The author

tries to survey general conditions of material living (food, habitation, etc.) and the ratio of mortality and morbidity. She insists that the classification of material living can be recognized in this society and the position of the "poors" would be determined only by the extent of their own material living. She also stresses that mortality and morbidity varies with such material conditions.

After referring to the general structure of the family, the author investigates the social relations in cities and rural regions from the point of view of social conditions of "poors". In the rural regions various levies including tax were collected from peasantry. This resulted in many peasantry fleeing to other regions or cities. The author finds that the construction activities in big cities, directed by the Empire, was absorbing such migrant "poors". On the other hand, with the help of the Roman administration, the Church and monasteries are found to have taken charge of social welfare performance. Patlagean insists that their activity should be regarded as another redistributive function of this society.